

今村容生

今村明登瓦工場 四代目



高度な**特殊瓦**を一手に担う
 工作好きの少年のような**瓦職人**

底抜けのパワーは心の充実から

一度新しい瓦の製作にかかれば、時間があればとにかく仕事。正月など休日の方が来客がないので、製作が捗るそう。たまの楽しみといえば、10日間ほど仕事から離れて過ごす、奥さんとの海外旅行。ハワイ、イタリア、ドイツ、フランス、中国、韓国、タイ：意外にも国際派だ。奥さんが買い物をする一方で容生さんは史跡を見て回るけれども、その建造物を成す石やタイルにどうしても目を奪われるという。瓦がそんなに好きなのかと思ったら「いや、好きではないよ」と即否定された。

旅先で奥さんが古いとパワーストーンのお店に行ったときのエピソードもまた面白かった。お客さんのオーラを見ておすすめの石を挙げている店員が、容生さんを見るなり「あなたはパワーあるから石いらねえ」と言ったそう。びっくりした、と笑っていたが、容生さんの心身が充実していることが見えたのだろうか。

「瓦は仕事だから徹底的に楽しむ。楽しめるように心と体を大切にすることが大事。そうしていれば仕事はもたえるし、ストレスも溜まらない。人間ってそういうもんですよ。」

事も無げに笑ってそう言うけれど、それが難しいと感じる人も多い世の中だ。流されず、成長を止めないシンプルなお人。そんな肩肘を張らないシンプルな生き方を、うらやましいと思った。

「今村明登

瓦工場」

城島で四代に渡り瓦やレンガの製作を手掛ける。容生さんと造形を担当する鬼師の二人で、焼成後に燻す製法でできるいぶし銀の一般的な屋根瓦の他、公共の建物や神社仏閣に使うための特殊な瓦の製造も請け負う。

☎ 0942-62-2369
 住所/久留米市城島町楮津1093-1

1.ある文化財のために作った瓦には、製作時期と工場名がしっかりと刻印されている 2.文化財から取り出した復元前の瓦。細部まで調べ、泥の質や焼き方などを分析する 3.こんな黒いレンガも製作する。これがまた新しい建築物の一部となる予定だ 4.泥とは思えない滑らかな曲線の乾燥中の瓦。焼成後に縮むことを計算に入れた大きさ





難題であればあるほど 目の奥にキラリと光る情熱

文化財はどれも違う、
だから面白い

城島の瓦産業は、明治から昭和
中ごろまで経済の成長とともに発
展してきたが、ここ数十年のうちに
生産数が減り、斜陽の時代を迎え
ている。「今村明登瓦工場」でも苦
しい時期があったが、容生さんの先
代が特殊瓦に切り替えたそう。だ
そのおかげで特殊な注文に対応で
きる大きな窯や型など度重なる設
備投資もして工場は広大になり、
今や容生さんは同業者や設計士た
ちから頼りにされる存在になった。
「九州の文化財は建築された時
期や場所によって、瓦の様子が全然
違うんですよ。だから復元をやり
切る職人があまりおらんから、皆に
頼まれるんですよ。でも私にとっ
ちゃ、一つひとつ違うのがまた面白
いし、復元するために考え込むのも
楽しい」。

昼夜関係なく試行錯誤し、試作
品にOKが出れば1つの案件につ
き1万に上る気の遠くなる枚数
を、手作業で製作するそう。中に
は長崎・グラバー園、大分・草野本
家など、誰もが知っている文化財の
名も上がる。名だたる文化財に関
わる喜びがあるのかと思ったら、そ
ういう思いは全く無いのだそう。

「新しい課題にぶち当たったら、
またやってやるうって思う。それだ
けです」。根っから職人である気質
がここに表れている。掛け値なしで
技術に心血を注ぐ人がいるから、
文化財は時を経て姿を変えない
でいるというわけだ。

「ここにはいろんな人がいろんな
相談に来る。楽しいですよ。うち、
ホームページもなければ取材も普
段は受けんけん。携帯に電話がか
かってきても知らん番号やったら出
らんよ。」

来てもらって話せば新しいことが



Profile 今村 容生さん

城島町の【今村明登瓦工場】四代目の瓦職人。一般の屋根瓦のほか、公共の建物の塀瓦、敷瓦、歴史的な文化財の瓦の復旧などを手掛ける。趣味は海外旅行で、アジアやヨーロッパなどを訪れては仕事から解放されてのんびりと過ごすのを楽しみにしている。

わたしの情熱の源泉

【夜に食べる納豆】

酒もご飯も人並みに。瓦作りにしっかり体力を使うために発酵食品である納豆をもう何年も食べ続けているそう。一転して、朝ごはんはチョコと甘めのコーヒーがルーティーン。

起きるけん、私はそっちの方がいい。なるほど、ここに来るまで実態がつかめなかった理由はこれだったのか。確かに実際会うことで、難問に挑み続ける容生さんのエネルギーを十分に感じる事ができた。

Three Questions / 匠人 3のことに聞く

1 何歳まで仕事をしますか？

あと10年はしたい。天神ビッグバンの仕事も受けたいし、設備投資もしてしまったから、あと10年はこのままで。中途半端に休むと逆に体がきつくなるけん、旅行のときしか休まんよ。

2 海外の瓦で、気になったものは

タイの瓦。城島のより小さくて、屋根にびっちり魚のウロコみたいになっていて、面白かった。確か記念に数枚もらって帰ったよ。

3 瓦は好き？

好きじゃない。瓦は家業としてやってきたから、自然とそうなんだ。好きじゃなくても楽しむように気持ちをもっていく。それが大事。

無理難題を 楽しんでしまう瓦の達人

取材前から何やら不思議な感覚があった。「今村明登瓦工場」は地図では確認できるものの、ホームページも商品情報もインタビュー記事も見当たらず、電話も繋がらない。これほど事前情報の少ない取材は初めてだ、と思いつつ、筑後川沿いに車を走らせていると、大きな看板を発見。建ち並ぶ工房の間から出てきて、ニカッと笑って出迎えてくれたのが容生さん、その人だ。

工房の奥にある事務室に腰かけて挨拶を済ませると、今取り組んでいる瓦について一気に話を始めてくれた。「こっちは淡路の泥で焼いたけん色が付きやすい。奈良とか名古屋の泥だと耐火度が高いけど色が付きにくい。泥で全然違うんよ」。聞けば、容生さんがつくる瓦のうち一般的な屋根瓦は1割、あとは新しい建築物や古い仏閣の復元の特殊瓦を一手に引き受けている。取材当時は福岡市の天神ビッグバンに関わる黒いレンガ作りに挑んでいた。城島の瓦というといふし銀が特徴なのに、黒い艶消しのレンガが求められていて、泥の性質や釜の温度を調整する必要があった。すべてが受注生産だから、厚み、色味、形、手触り、光沢の具合や滑らかさなどに細かな注文がつく。その



度に粘土の質、温度、焼き方、成形の仕方を変えるのだ。

「設計士は無理難題ばかり言いよるんよ。試作を繰り返して作り方を考えて儲けなんか大してなくなるんやけど、なんとか実現する方法を見つけて。これが面白い」と言ってまたニカッと笑う様子は、まるで工作好きの少年のようだ。「昔の瓦は今のより出来は悪いんですよ、でもそれに合わせないといかん。昔の瓦に穴がほがしてあったら、わざと穴をほがす。泥もわざと悪い泥を使う。でないと国や文化庁はOK出さんからね」。